

健康文化

恍 惚

今井田 二三子

恍惚という言葉を目にしたとき、作家というのは私の考えもつかないような言葉を生み出されるものだという強い印象を受け、折りにつけこの言葉を無断借用しておりました。その後また私の女学校時代の友達から「恍惚は神佛から年寄りにおくられる最高の贈り物」だといわれ大変感心しました。そのためでしょうか、それから暫くして恍惚の始まった母と六年間ほどつき合うはめになりました。

かぞえ年十五才で父を亡くしております私は、明治の気概をもった母に育てられ、叱られることはあっても決して誉められることはありませんでした。その叱り方のテンポと迫力からして、もしかしてこの母は恍惚と無縁な生涯を送れるのではないかと心ひそかに思っていました、その思いが崩れ去る日がおとずれてきました。

東京在住の母の甥が「郡上八幡に自動車の修理工場を造った」と私にも近所の人々にも言いふらすようになりました。その従兄は自動車関係の会社に勤めていたため、始めは私も話の内容は少し違っていても、なかば事実かもしれないと思ひ、また事実であることを心の隅で願いながら聞いておりましたが、それが事実無根と知ったとき、これは大変なことになったと思いました。母の架空の話は一緒にいる私が聞いても本当かもしれないと思うようなものから、明らかに幻覚とわかるものまで種々と、よくもまあ、あとをたたずにつくりだせるものだと私をあきれさせておりました。

さらに恍惚がすすんできますと、今度は七輪のなかに新聞紙をつめ、その上に枯枝のせて火をつけ空の鍋をかけて私の肝を冷やしたり、畠の草を取りに行くと言って長靴と草履を片方ずつはいてでかけたり、夜中に以前に使っていた戸外のトイレに行こうとし、その度ごとに私は草履を持って追いかけたり、無理矢理連れもどしたりしておりましたが、不思議なことに判断力は鈍っていても自意識は残っており、母の行動を止まらせようとしたり、間違いをただそうとすると、おこりだす有様で、私の方も母の見えていないときにマッチ、包丁などを手の届かないところへ片付け、夜は戸口に一番近い部屋で眠り、母の好ん

ではなく草履を揃えておくようにしましたが、火の防止以外は成功率は50%と
いったところだったでしょうか。自分の行動が異常だと気付かない母を説得し
納得させるのに手こずることが度々でした。それを私は介護の戦国時代と名付
けておりました。

戦いはますます激しくなりクライマックスの黄金（便の失禁をそう呼んでい
ました）の戦いでやっと下火になりました。

私自身の未来像を眺める気持で、何時まで自力でスプーンを口まで運ぶこと
ができるか、襦袢（むつき）なしでゆけるか、気長に見守ることに決め、昼間
だけ介護を頼んでおりました家政婦さんにも協力をしてもらっていましたが失
敗も度々ありました。

雪の朝、深更からつづいた黄金の戦いが終わり、洗いあがった洗濯物を洗濯
機の中からとり出しながら、おりから昇る朝日の光をうけて小枝の雪がキラキ
ラと輝き、やがて雫となって降り積もった雪の上に落ちて吸い込まれてゆく
のを眺め、母の生命の先を見ているような気がして胸の詰まる思いがしたこ
ともありました。

食事を私たちが食べさせるようになり、また襦袢を使うようになってから母
も私達介護者も穏やかで平和な日がつづくようになりました。

田舎の家へ嫁いできた母は、いつも食事をするのは家族が終わりかけてから、
また私は成人するまで菓子を食べている母の姿を見たことがありませんでした。
神佛はそんな母を憐れんのか食欲は最後まで残りコーヒー、苺、それに大好き
な和菓子を今は誰に遠慮することもなく、食べさせれば僅かに言える言葉の一
つ「美味しい」を繰り返しながら子燕のように何時までも口をあけて次を待っ
ておりました。美味しいという言葉を楽しむに美味しそうな和菓子を探して
歩いたこともありました。母の好物を私以上に承知の近所の方々からは絶えず
何かと差入れがあり結構若い頃食べれなかった分の埋め合わせがついた
ようです。

また私たちはコーヒーや苺を、母をポータブル便器にかけさせたり、入浴を
いやがる時の手段につかっておりました。「オシッコをすませたらコーヒーを飲
もうネ」とか「風呂からでたら苺を持って来るから」などと言いますと、暫く
考えていて「オシッコをすまさなくてもコーヒーは飲める」などと、もっとも
な返事がかえり私達を笑わせてくれました。丁度母の尿意とタイミングが合っ
たときには「有難やま」などと言いながら動けないながらも私達の行動に協力
体勢をとることもありました。

やがて寝返りもできなくなってきましたが幻覚の中ではかえって自由に動く

ことができたようで、或る朝、いつものように私が目覚める直後に母をみますとニコニコとして「ありがたい、笠松（母の実家の地名）の父親と、いま金華山へきている」とか、「お詣りにきてアミダ様の前に坐っている。皆さんに親切にしてもらえるので、しばらくここにいるから」などと、こちらの言うことは何も理解できない様子なのに、自分の言いたいことは、たどたどしいながら不思議に言葉になるようでした。私が理解できた最後の言葉は「校長先生から本をもらった」私の「どこの校長先生？」という問いかけには無言、その翌日は「女の先生にあった」でした。恍惚の頭の中に楽しかった、そして嬉しかった小学校の頃の姿が去来していたのでしょうか。

喉につまることを心配して食べさせることを躊躇していました好物の餅を、おそらく今年が最後の正月になるだろうと思い、近所からいただいた粘りの少ないのをたべさせましたところ、その頃夜の食事は一時間近くもかかっていたのに二個の餅を二十分ほどで食べ終わり、まだ欲しそうに口を開いておりました。意識のなくなる昼にも僅かでしたがコーヒーを飲み苺を食べることができましたが、その夜からは全く何の反応もなくなり二日後に永眠しました。

幻覚の中で先生におあいした少し前に、母は心のどこかで快復の望みのないのを感じたのか、あるいはもう生死はどちらでもよくなったのか「アミダ様は忘れてみえる（私を忘れていらっしゃる）から迎えを頼んできて」「ここへきて幸せだった」などと私に告げました。長男と次男に先立たれ、一人残った私は長期の療養生活、そして姑と舅の姉に仕え娘の私がみても決して幸せとは思えなかった母の生涯でしたが恍惚な頭の幻の中では幸福な日々がつづいたのでしょうか、介護者にとって嬉しい言葉を残してくれました。

私は恍惚にだけはなりたくないと思いつづけておりましたが、今は周囲の人々に迷惑をかけることになるが恍惚もまんざら悪くないと思いはじめております。母と私を支え助けて下さいました多くの方々に心から感謝をしております。

（内科開業医）